

## 減圧吸水および冷水浸漬処理によるワケギ‘さが乙女’の作期の拡大

高取由佳・田川 愛<sup>1)</sup>・畑瀬房次・田中政信  
(佐賀県農業試験研究センター・<sup>1)</sup> 三神農業改良普及センター)Yuka Takatori, Ai Tagawa, Fusatsugu Hatase and Masanobu Tanaka :  
Magnification of wakegi onion cv. ‘Saga-otome’ by treatments with water supply under reduced pressure  
and with cold water immersing

佐賀県が育成したワケギ品種‘さが乙女’は休眠が浅いことから、6月上旬に種球の定植を行い、7月に収穫する早期栽培が可能である。しかし、現場においては、さらなる出荷期の拡大が求められている。そこで、本試験では、‘さが乙女’の未成熟種球を用いた作期の前進化について検討した。

## 1. 材料および方法

供試品種としてワケギ‘さが乙女’を用いた。作期前進化の方法として減圧吸水および冷水浸漬処理を適用した。種球は、前年の9月に定植したものを5月中旬に掘り上げ、乾燥貯蔵した。なお、5月中旬処理区までは、処理当日に種球を掘り上げた。球根から2cm萌芽した日を萌芽日、草丈50cmを収穫適期とした。

## 試験1：減圧吸水処理

減圧吸水処理は、種球を水に浸漬し、1/4気圧で30分間の処理を行った。2001年は、4月中旬～6月中旬の間に7回の処理を行った。2002年は、種球養成時に電照をかけて種球の成熟を早め、3月下旬～5月中旬の間に6回の処理を行った。

## 試験2：冷水浸漬処理

冷水浸漬処理は、2℃および7℃の冷水に、それぞれ2, 4および6日間浸漬した。2002年の5月上旬と下旬に処理を行った。

## 2. 結果および考察

## 試験1：減圧吸水処理

種球は掘り上げ時期が遅いほど、葉鞘基部径が肥大し、種球重も重くなり、成熟が進んだ。

2001年の試験の結果、すべての減圧吸水処理区において萌芽日数および栽培期間の短縮が認められ、特に4月下旬から5月中旬にかけての効果が大きく、4月25日処理区では萌芽日数を14日間、栽培期間を14日間短縮できた(第1図)。また、最も早いもので、6月中旬に収穫することができた。しかし、一方で4月初旬および5月下旬以降の処理区では、処理効果は認められたが、小さく、6月中旬処理区においてはほとんど差が認められなかった。

また、収量においても減圧吸水処理による増収効果が認められ、良質で安定的な収量を得ることができた(第2図)。

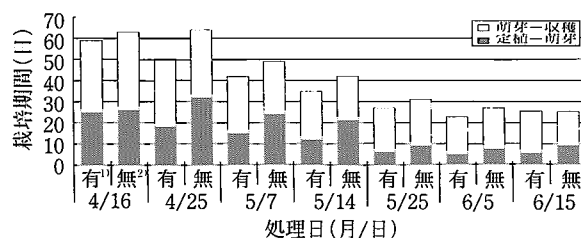
2002年の試験の結果、減圧吸水処理区では、露地区よりハウス電照区に栽培期間の短縮効果が認められた(第3図)。一方、無処理区では、ハウス電照の効果が認められなかった。したがって、種球養成時の電照と減圧吸水処理との組み合わせが、作期の前進化に有効であると考えられた。また、3月下旬の減圧吸水処理では、栽培期間の短縮効果が認められなかった。これは、種球が未成熟であったために減圧吸水処理の効果が現れなかった

と考えられる。

## 試験2：冷水浸漬処理

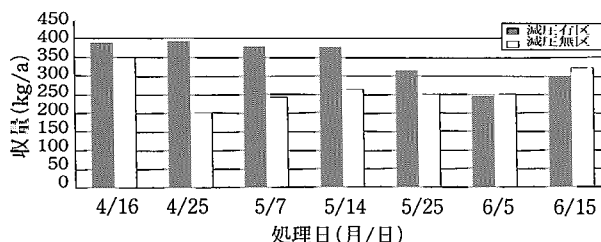
冷水浸漬処理の結果、減圧吸水処理と同様に萌芽日数および栽培期間の短縮が認められた(第4図)。2℃および7℃の温度による差は特に認められなかった。5月下旬区では、2日間の処理でも十分に効果が認められたのに対し、5月上旬区では、4日間の浸漬期間を要した。これは、5月上旬での種球の休眠が深かったことによると考えられる。

また、収量においても、減圧吸水処理と同様に、冷水浸漬処理による増収効果が認められた。

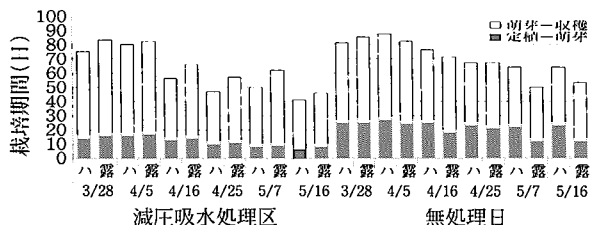


第1図 減圧吸水処理が栽培期間に及ぼす影響

注) 1) 減圧吸水処理区, 2) 無処理区

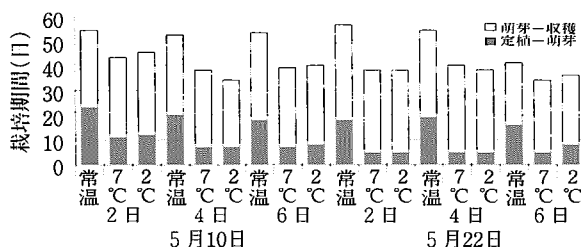


第2図 減圧吸水処理が収量に及ぼす影響



第3図 減圧吸水処理および種球養成が栽培期間に及ぼす影響

注) ハ：ハウス電照区, 露：露地区



第4図 冷水浸漬処理が栽培期間に及ぼす影響